

読書の楽しみ

放送大学大阪学習センター所長 柏木隆雄

I さまざまな本

北京オリンピックの華美壮大な演出の下で展開された開会式が、CGを使った花火であったり、歌っている少女の口に合わせた歌が流れたり、いろいろ取りざたされましたが、電子技術万能のこの時代、ある意味ではそれほど目くじらを立てるほどのことではない、むしろ最新鋭の技術を駆使したところに、演出の得意があったのかもしれない。

実際、近頃はインターネットや携帯電話で、さまざまなバーチャルな世界が人々の心を占領しています。少し前のことになりますが、知り合いの家に招かれて、「wii(ウィイ)」と称する野球ゲームがあることを教わり、その友人の一人息子の中学生と一緒に遊ぶことになりました。おっかなびっくりで、ゲーム機の操作をしましたが、その臨場感の素晴らしさと実際バットを振り回してボールに当てたような感覚を覚えるなど、たかがゲームと侮れない、人を興奮させるもののあることに驚嘆しました。とても面白かったのですが、アナログ人間を自覚する私としては、果たしてこれでいいのかな、と思ったことも事実です。この実戦的感覚、というか体感、あくまで「感覚」であって、実戦そのものではありません。その時、もう一つの小さな事件がありました。その日はちょうど、その子のお誕生日で、お父さんである私の友人がお祝いに日本の近代文学の短編100作分が入っているゲーム機をプレゼントしたのです。それは小さい文庫様の大きさで、スイッチを入れると、たちどころに「羅生門」とか「注文の多い料理店」といった100作の内容が画面に表示されます。そして気に入ったタイトルをクリックすれば、その作品が冒頭から全文現れる仕組みです。

野球ゲームに負けた私は、名誉挽回とばかり、その読書好きの子に、じゃあ今度はおじさんと読書ゲームで勝負しよう、君がそこに入っているどの作品の、どの行から読んでも、作者と作品名を当てて見せるよ、と言ったら、中学生は目を輝かせ、意気込んで何作かを読んで聞かせます。「あ、それは～の～という作品」と正解すると、よし、それではとまた次の問を投げかけてきました。まあ100発100中とは行きませんでした。まずほとんど当てる事が出来て「おじちゃん」の面目を保つことが出来ました。家に帰ると、その中学生からメールが来ていて、「おじちゃんの、コンピ



ューターに負けない頭脳にびっくりしました」とあり、今の子供は、コンピューターの方が人間よりも賢いと思っているのだなあ、とまた別の感慨をもったことでした。

それほど沢山の本を読んだわけでも、全文空で覚えているわけでもありませんが、それこそ小学校時代から、図書館でいろいろ本を読むことを楽しみに日を過ごしてきたせいでしょうか。作品のある部分を朗読してもらっていると、ちょうど絵巻物が頭の中に広がる具合に、初めおぼろげだった小説の全体が、だんだん色濃く浮かび上がってくるのです。これはマジックでも何でもなく、読書を喜んだ、そして小さい時から読書を遊びの一つとしてきた者なら、たいてい経験することだと思います。

そんなことを中学生にも話したのですが、彼もまた小さい時から読書好きでしたから、その翌日からそのゲームに収められた100作品を読み始めて、殆ど読み終わっているようです。まことに結構なことですが、そのこととは別に、やはり私は、いや、ちょっと待てよ、と考えて、もう一言付け加えたいような気がしてしまうのです。

やはり本は本として読みたい。なぜなら当の作家たちは、紙に印刷して、その余白や紙の手触り、色までも考えながら執筆していたのではないのでしょうか。そのことはいろいろな詩集を見ればよくわかります。詩人たちがどれほど活字の大きさや行間、挿絵に心を砕いていたか。それは洋の東西を問わず同様です。ワンタッチで画面が変わって、次の頁が出てくるより、考え、考えしながら、頁を繰って、その紙の厚さ、滑らかさ、あるいはごつごつとした手触りを確認しながら、新しい世界に遭遇する。そういう楽しみを、古くさいと捨ててしまわなければならないように思います。

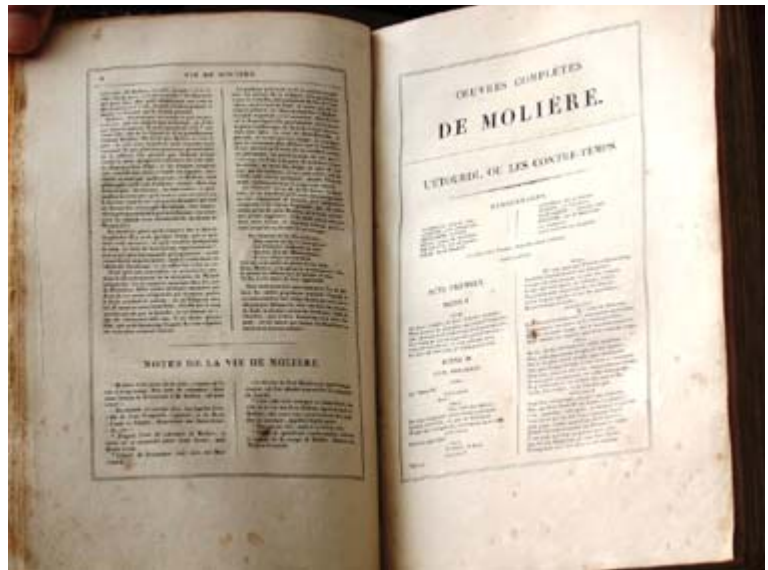
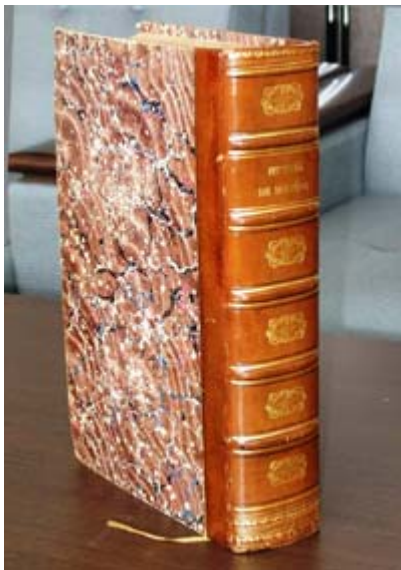
本を読む楽しみは、単にその本それだけではない。そこから縦に、横に広がる世界を想像すること、紙の匂いに、活字の黒さに、行間の白さに、表紙の彩色に、いろいろな思いが込められていることを知って、本をいとおしむ。それもまた大きな楽しみです。そんなことから私は古本を読むのが好きです。古本屋さんのカタログをパラパラとめくるのはもっと好きです。さらに気に入った本があつて、注文してそれが手に入った時の喜びは、それに倍するものがあります。近頃手に入れた数冊を、すこしお目にかけてみましょう。



バルザック『貧しき縁者たち』全12巻、パリ、ペチオン版、1847年～1847年

ひとつは私が専門とするフランスの作家バルザックの傑作『いとこベット』『いとこポンス』の二部作『貧しき縁者たち』の初版で、これは当時の貸本屋さん用につくられたもので、曲亭馬琴の『里見八犬伝』などと同じく、貸本屋ではひとつの作品を、活字を小さくして一冊で刊行したものより、活字を大きく、また行取りを広くして、一冊にそれほど内容を盛らず、何冊かに分冊して刊行して、借り手を増やす工夫をしていたのです。

もっとも19世紀の初めごろは、ダイヤモンドと呼ばれるごく小さな活字で、ある作家の全部の作品を一冊に収めようとした本も流行していたようです。17世紀の喜劇の巨匠モリエールの全集をお目にかけてみましょう。



『モリエール全集』全1巻、パリ、マーム&ドロネ=ヴァレ版、1825年

実はバルザックも小説家になる以前、出版業を志して、同じモリエールの一冊本全集や、ラ・フォンテーヌの全集を出して、あえなく倒産の憂き目を見ています。活字の大きさは小さいものからダイヤモンド、ルビー、エメラルドといった宝石の名前であらわされ、活字に付ける振り仮名をルビというのは、ルビー型の小さい活字ということからきているのです。

もう一冊お目にかけてみましょう。太宰治の『人間失格』初版。これは私が古本屋さんで買ったのではなく、今は英文学の先生をしている女性から、「父の書棚にあったもので、良かったら」といただいたものです。この本の発行は戦後間もなくの1948年7月。そのほぼひと月前の6月13日に、太宰は玉川上水に戦争未亡人の山崎富栄と身を投げて、情死したばかりでした。この本には、遺作となった朝日新聞連載の「グッドバイ」が未完のまま一緒に収録されていて、作者の異常な死の



太宰治の「人間失格」初版
(1948年7月、筑摩書房)

こともあって、一挙に評判となりました。こういう一種際物的なものは、えてしてどつと売れて、あとはどこかに捨てられてしまい、さて探すとなると、なかなか綺麗な形では見つからないのですが、こうして書棚に残されていると、その表紙デザインのいかにも「人間失格」的な字の配置といい、戦後のアート感覚を如実に見せるものとして貴重です。この本の奥付のところに、購入された父上の鉛筆書きで、日と場所が書かれています。それが英語であることも時代を偲ばせて興味深いものがあります。つまり、この父上が学生であった時代、ついこの間まで英語は敵性語として、学ぶことはおろかローマ字書きまで禁止されていた、そのことから起こる飢餓感にも似た気持ち、またアメリカ軍進駐を目の当たりに見て、これからは英語の時代だという意識が、新時代の到来を象徴する英語で記させたのでしょう。

II. 子供の読書 一畑田塾の経験と意義一

しかし、こういう隠居の道楽のような話はさておき、ここで強調しておきたいのは、本好きになるきっかけは、小学校、中学校の時が多いということです。よく読書の大切さを知っているお母さん方が、早くから児童書の読み聞かせをして、読書になじませる、という話を聞きます。たしかにそれも大事なことです。が、何よりも読書は強制しては効果がすくないということも知るべきでしょう。

私の場合、兄や姉たちがやはり読書好きで、そういう姿をよく見ていたこともありますが、自分が読んだ本のことを姉や兄たちに話して、一緒にそうした読書の輪に入ったことも大きいと思っています。周囲の者が楽しげに本を読み、その内容について語る。そうするとつられて、多少の競争心もあるのですが、自分も読んでみようとして頑張る。その時、読書の種類を限らない方がいいでしょう。とにかく興味あるものを読ませる。多少ひねこびた、大人っぽいものに手を出しても、それは難しいから、とかそれは早すぎるとか、言わないこと。読書はあくまで主体的でないと身に付かないものです。

思えば私が小学校の時に読んで感激したのは、アレクサンドル・デュマの『岩窟王』でした。講談社少年少女名作全集の一つだったかと思います。同じ作者の『三銃士』も喜んで読みました。私がフランス文学を専門にするようになったのも、案外そこらへんにルーツがあるのかも知れません。日本の作家では芥川龍之介。あの暗い顔で、顎に手を当て、妖しげな眼の光が、その瞳の奥から刺すように光っている写真をカッコよく思ったのでしょうか。それとも「羅生門」の下人のニキビが、ちょうどニキビを患う年頃で、なんとなく下人への思い入れが強くなったからでしょうか。ちょっと知的で、皮肉な、いかにも秀才らしい筆つきが私をすっかりファンにしてみました。そして貧しいけれど母と兄弟6人でワイワイ言いながら食べる夕食のあと、皆で読んだ本の話話を披露しあったり、年鑑などに記載してある人物事典をネタに、クイズ

もどきの遊びで夜を過ごしたのも、知識を楽しく増やした良い機会だったようです。

その意味で、小・中学生がそのご両親たちと一緒に、いろいろな先生の専門的なお話を聞く、というのは、実に刺激的なもののように思います。私が歴史の重みを感じさせる羽曳野市畑田家の広間で、小学校、中学校の生徒さん、それにそのお母さんたちも含めた「畑田塾」でお話をさせて頂いたのは、もう今から5年も前のことになります。2003年3月29日の日曜日。私の日記には「ストラスブールでの講演も気持ちよく終われたし、古本屋も安く貴重な本が買えた。3月27日にパリから帰って、翌々日29日は羽曳野で小、中学生を相手に話す。難しかったかもしれぬが、大人には好評であった。」と記してありますが、果たして本当に大人の方には好評であったか、いささか自らの日記の信憑性を疑う気持ちもないわけではありません。当日はなかなか良い天気、時節柄、春の盛りを歌う詩のうち、私の好きなものを2編取り上げて、それを読み上げて実に良い心持ちで解説したことを思い出します。

子どもたちは畳の上にきちんと膝を揃えて座り、皆私語することなく聞いてくれました。後ろの列でお母さん方や保存会の諸氏がこれもきちんと座って聞いていてくださって、日頃は親父ギャグを入れたりして学生の^{ひんしゅく}響聲を買うところを、まず真面目に一通りの話が出来たことは嬉しい思い出です。

読書の楽しみを説いたつもりのその時の話を以下に記してみることにしましょう。

Ⅲ. 満開の花

その一つは盛唐の詩人、繊細華麗の詩風で知られる李賀の「将進酒」で、その詩は以下に示す通りです。

将進酒	酒を勧む
琉璃鍾 琥珀濃	<small>るりのさかづきこはくこまや</small> 琉璃ノ鍾琥珀濃カナリ
小槽酒滴真珠紅	<small>しょうそうさ けしたた しんじゅくれない</small> 小槽酒滴リテ真珠紅 ナリ
烹龍炮鳳玉脂泣	<small>りゅう ぼう ほう つつみや</small> 龍ヲ烹鳳ヲ炮キテ玉脂泣キ
羅幃繡幕圍香風	<small>ら いしゅうぼくこうふう かこ</small> 羅幃繡幕香風ヲ圍ム
吹龍笛擊鼉鼓	<small>りゅうてき たいこ</small> 龍笛ヲ吹キ鼉鼓ヲ撃チ
皓齒歌細腰舞	<small>こうし さいようぶ</small> 皓齒歌ヒ細腰舞フ
況是青春日將暮	<small>いっわん これ</small> 況ヤ是青春日將ニ暮レントシ
桃花亂落如紅雨	<small>とうか らんらく</small> 桃花亂落シテ紅雨ノ如シヲヤ
勸君終日酩酊醉	<small>すす しゅうじつめいてい</small> 君ニ勸ム終日酩酊シテ酔ヘ
酒不到劉伶墳上土	<small>さけ りゅうらいふんじょう いた</small> 酒ハ劉伶墳上ノ土ニ到ラズ

李賀（791－817）字は長吉^{あざな ちようきつ}は、例の楊貴妃をめぐる白楽天「長恨歌」で名高い安祿山の乱が終息してから、ほぼ三十年後に生まれました。我が国では桓武天皇の御

宇、延暦10年にあたります。唐帝室の裔を自称して、不羈の才を若くから示した彼については次のような逸話があります。当時の文壇の大物韓愈が、ある日一詩を携えて突然訪れた白面の貴公子を、間断ない賓客の煩わしさに、面識のない青二才として「門前払いを食わせろ」と召使に云いつけ、衣服を解こうとしてふと青年が一読をと召使に渡していた詩稿に目を通すと、その鮮烈な詩句に一驚、衣服を改めて青年李賀を招じ入れて、共に詩を談じたといひます。もちろん多少の誇張はあるのですが、韓愈が李賀を厚く遇したのは史書の示すとおりです。この天才は二十歳で進士に合格すべきところを、その才を嫉んだ官吏に阻まれ、以後不遇の短い一生を送りました。享年二十七。芥川龍之介が李賀の詩を好んだのはよく知られています。とりわけこの「将進酒」を愛したようで、彼が中学生の頃、授業中にノートに何か一生懸命書きつけていると思ったら、授業のメモではなく、実はこの詩を書いていた、という彼の旧友の思い出を読んだことがあります。

さてこの詩、「将進酒」は「さあ、酒を飲もうよ」といった漢代の民謡に倣ってはいませんが、民謡の世界とは異なる、艶麗華美な、しかしどこか、陰影のある、まさしく薄幸の青年詩人の鬱屈を、春の盛りの宴に発散する趣きのあるものです。「琉璃ノ鍾」はガラス製の高価なものでしょう。透明なクリスタルの小さなグラスか、あるいは彩色の施された腰高の杯か。そこに湛えられた酒の「琥珀の色が濃い」。琥珀色というのは、古酒などの色を指すかと思われませんが、荒井健の注（岩波「中国詩人選集」第14巻）を見ると、「酒の色の赤さを指す」とあって、あるいは葡萄酒ではないかということです。

確かに例の王翰の「葡萄の美酒、夜光の杯」という句も有名で、それと響きあう一句であるとともに、次の「小槽酒滴リテ真珠紅」と、酒を入れた桶から赤い色をした真珠のような酒の滴がこぼれる、とあるのと同じ赤色の酒、すなわち葡萄酒という荒井の説が正しいのですが、琥珀という語の響きは、やはり老酒などの色をいうのではないかと、ことさら日本酒を愛好する者としては、そう読みたくなります。まして李賀のいる河南省洛陽の西50キロにある昌谷という地の酒は、北京などにある高粱などの蒸留酒でなく、やはり粳米で作った老酒に似たものではなかったでしょうか。第二行の「小槽」にある酒は、その地理的状況からも西域からの葡萄酒であるのは間違いありません。酒飲みの私としては、第一行が古酒を歌い、第二行でまた別の異国の酒がふんだんにある様を示して、いかにも華やかな宴を予感させるところにその巧があると、ついそう思ってしまうのです。

そして、だからこそ、第3行は「龍ヲ烹鳳ヲ炮キテ玉脂泣」く様、すなわち酒の肴が、その香り、焼け具合、煮具合までも如実に見えるように描写されるのです。龍というのは、まさか本物の龍ではなく、龍の肉にも匹敵するような獣の肉でしょうし、鳳は、おそらく美味な鶏肉を美称して言うのでしょう。「炮」く、というのは、草を

編んで、それに肉を包み込んで焼くことだそうです。その草の焼ける匂いと、燻された肉の美味。思うに涎が垂れてきますね。それかあらぬか、そのあと、その焼けた肉からの「玉脂」が滴り落ちて、先の酒が真珠のように滴るのと同じように、キラキラと輝きながら、一方は冷たく光って喉を鳴らし、一方が熱く光って舌を招きます。そしてその宴は、解放された野原の遠遊ではない。まさしく市中、豪華な邸宅の一室。

「羅幃」は目が詰んでいない軽やかな絹の屏風で、それにやはり絹糸のこまかく編まれた布の幕、「繡幕」が、あたりに立ちこめる酒と料理の香を「圍」むわけです。「羅幃繡幕」が曲者で、こもごもの匂いを取り囲みながら、微かに、余香をその周辺に漏らす仕掛けとなります。なんとも息を飲むような光景ではありませんか。

目と舌との楽しみに、更に加わるのが、次の行、「龍笛ヲ吹き鼉鼓ヲ撃チ」と音楽が奏でられることです。「龍笛」とは龍の鳴き声に似た音を出す笛、とのことで、いったい誰が龍の鳴き声を聞いたのか。そんな屁理屈はともかく、素晴らしい音色を出す笛をそう呼ぶのでしょう。「鼉鼓」は鱧皮でできた太鼓。皮を叩くのか、太鼓の側が鱧皮で巻かれているのか素人の私には詳らかではありません。いずれにしても奈良の節会などで演奏される際の雅楽の太鼓を思えばいいでしょうか。これまた艶にして、縹渺とした趣の笛の音と、韻律豊かに酔いの進行を示すかのような太鼓の音が耳を楽しませます。

そしてその楽しみの極まりが、「皓齒歌ヒ細腰舞フ」光景。もちろん「皓齒」と「細腰」の持ち主は若い女性ですね。いわゆる歌妓と舞妓が、それこそ芬々たる香風を、折からの美酒佳肴の香りに混ぜて、宴をいやがうえにも盛り上げて、歓楽の極みを演出する。その時詩人はその極みにあって、しみじみと感慨に耽るのです。今謳歌している春の一瞬はやがて終りを迎えるのだ、と。「況ヤ是青春日將ニ暮レント」している。青春は、日本語にいう若い時という意味ではなく、ここは文字通り春の季節真っ盛りのこと。もちろん青春は若い人のことも言いますから、自らの若い日そのものをも暗喩するでしょう。「歓楽極まりて哀情多し」と昔からいうとおり、青春謳歌もたちまち、日暮れ（すなわち老年をも意味する）に至る。今咲き誇っている桃の花も、一陣の風に、まるで赤い雨のように乱れ散っていくものなのです。

「桃花亂落シテ紅雨ノ如シヲヤ」。このところの読みは佐藤春夫の訓読によりました。荒井健はただ「紅雨の如し」と読んでいます。じつは私がこの詩を畑田塾で話す題材に選んだのは、この詩句を春爛漫の、桃花ならぬ桜花亂落シテ紅雨ノ如シの様を当日の青空の下に想像したためでした。しかし普通の詩人なら、ここで諸行無常の感慨をさらに強める詩句を連ねるでしょうが、李賀は、さればこそ、と次の詩句を堂々と掲げるのです。「君ニ勸ム終日酩酊シテ酔へ」と。なぜなら「酒ハ劉伶墳上ノ土ニ到ラズ」。劉伶は晋の時代の文人で、竹林の七賢の一人として名ある人です。大酒飲みで、いつも荷車に酒甕を積んで下男に鋤を持たせて、もし自分が死んだら、この酒甕と一

緒に埋めろと言っていたという故事が有名です。そのことを踏まえながら、さらにもう一步話を翻して、死んでしまえば、お墓に酒を注いでも意味がないと李賀は歌うわけです。

宴のさなか、いかにも酔いを発して大声で喚くかの如くにこの結句を聞くか、それとも、歌妓乱舞の中に、冷然と杯を含みつつ、ぽつりとこの句を吟んでいる白晳^{はくせき}の秀才を思うか。この詩を読む人、聞く人それぞれの詩の理解があるでしょうが、いずれにしても、春まただ中に、満開の花を前にしての謳歌であり、青春への哀惜であることは確かです。

それこそまだ青春とは云えぬ、これから青春を迎えようかという小学校、中学校の生徒さんには、余りにも遠い感慨を説いたかも知れません。オジサンが一人、何を興奮して、いいですねえ！すばらしいですねえ、「^{とうからんらく}桃花亂落シテ紅雨ノ如シヨヤ」か！などと感心しているのかといぶかしく思ったに違いありません。しかし続いて引いたフランス、十六世紀の名詩人、ロンサールの次の詩は、それなりに興味を持ってくれたのではないのでしょうか。

IV. バラを摘み取れ

Quand vous serez bien vieille, au soir à la chandelle,	あなたがずいぶん年を取り、宵の燭台の下で、
Assise auprès du feu, devida ⁿ t & filant,	爐の近くに座って、糸を繰り、また紡ぐ時、
Direz, chantant mes vers, en vous esmerveillant,	私の歌を口ずさんで、感動して言うでしょう、
Ronsard me celebr ^o it du temps que j'étais belle.	ロンサールが美しかった時の私を歌ってくれた、と。
Lors vous n'aurez servante oyant telle nouvelle,	その時には召使の女もいなくなっているでしょう。
Desja sous le labour à demy sommeillant,	今は疲れて半ば夢うつつに、その新しい詩を聞いて、
Qui au bruit de Ronsard ne s'aill ^e resveillant,	ロンサールという名を聞いて目をさまし、
Benissant votre nom de louange immortelle.	あなたの名を不滅の讚辞 ^{ことほ} で言祝いでいる召使は。
Je seray sous la terre, & fantaume sans os :	私は地の下に、骨もない幻影となって、
Par les ombres : Myrtheux je prendray mon repos.	ミルトの木の影で休んでいることでしょう。
Vous serez au fouyer une vieille accroupie,	あなたは爐の傍で、背を丸めた老婆となり、
Regrettant mon amour, & vostre fier desdain	私の愛を無視したことを悔いているはず。
Vivez, si m'en croyez, n'attendez à demain :	今を生きるのです、私を信じて、明日を待たないで。
Cueillez dés aujourd'hui les roses de la vie	今日からすぐ摘み採 ^{つと} るのです、生命 ^{いのち} の薔薇 ^{ばら} を。

Pierre de Ronsard, *Sonet pour Hélène* XXIV ピエール・ド・ロンサール『エレヌに寄せるソネット 24』
Classiques Garnier, éd. de Weber, 1963 柏木隆雄 訳

この詩の作者ピエール・ド・ロンサール（1524-1584）は、フランス16世紀のいわゆるプレイヤッド詩人（先の竹林の七賢ではありませんが、イタリア・ル

ネサンスに端を発した、ギリシャ・ラテンの古典を尊重するユマニズムの洗礼を受けたロンサールを旗手とする若手の詩人七名)の一人で、「恋愛」をテーマにした多くの短詩を作るとともに、ホメロス『イリアッド』やヴェルギリウス『アエネイース』に倣う、フランス建国を歌う「フランシアッド」という長編叙事詩を書いたことでも有名です。

さて、この「エレヌに寄せるソネット」は、あまたあるフランス詩の中でもとりわけ有名なものですが、もう一度読み直してみると、先の李賀の詩に通じるところがありますね。つまり詩人は、恋人に対して、若い時分に、美しいうちに、人生を楽しまなくてははいけない。いつまでも美しいと咲き誇るバラに見とれてばかりいても、あるいは自分の薔薇の美しさを誇って、人を寄せ付けないでいても、すぐ枯れてしまうものですよ、だから、早く摘み取りなさい、と呼び掛けているのです。ちょうど李賀の詩が、満開の桃の花が散乱と舞い落ちる姿に、美の、歓楽の永続しないことを歌っているように、ロンサールの詩もまた、同じ人生の真実を歌っていることになります。

けれども、よくよくこのロンサールの詩を読んでみると、さらにまた先の漢詩とはちょっと違うところがあることに気が付きます。まず第一行からして、ちょっとギョッとするところがあります。「あなたがずいぶん年を取り」とあって、恋人に贈る詩に、まさに今、その美しさと若さを誇っている彼女に、年老いた時の姿を第一に思い知らせるのです。これは「あなたがずいぶん年老いた時」という未来形で言うことによって、一見恋人が「若い」ということを強調するという効果も表向きはありますが、老いの必然性をも、何よりも先ずはっきりと言うところに凄味があります。そうして、青春は一般的に「真昼」にたとえられますが、ここは「宵の燭台の下で」とあって、夕方、宵闇の迫るころ合いに時が設定されています。すなわち、まさしく李賀のいう「日將^ま暮^れレント」している状況ですが、李賀の場合は青春真っ盛りのイメージに続くものが、ロンサールは、老残の暗い灯影^{ほかげ}に照らされた老女を想像させるのです。「燭台」は、もちろん、命の象徴でもあります。昨夜の燭台の光は、まさしくちらちらと火影の点滅するような衰えゆく命の火を暗喩するようです。

次の詩行で「爐の近くに座り、糸を繰り、また紡ぐ時」とあるのは、いかにも老婆のしぐさですね。若い女性は暖炉の傍には寄らないでしょう。糸を繰り、紡ぐのは、若い時には身分ある女性もするものですが、老いてこうした作業をするのは、いかにも侘しく、背をかがめてする作業の孤独さが浮かび上がってきます。あのソルベールの紡ぎ歌でも知られるように、糸を紡ぐ時には、歌を歌って、調子を取るものですが、それは紡ぐ人が若ければ、軽やかに、優美なものでしょうが、老婆が歌うものは、かつて彼女の恋人であった詩人が、その若い時分の美しさを歌ったもの。そして、思わずしらず、その歌の作者の名を思い出し、「ああ、そういえば、私が美しかった時、あの人が私を恋する歌を歌ってくれたのだった！」とつぶやく。

詩人が歌を捧げた時には、おそらく彼女には沢山の取り巻きがいて、その詩の巧みさを褒めそやし、そこに歌われた彼女の美をも讃嘆したに違いありません。その時には年老いた下女がいて、ロンサールの詩句を夢うつつに聞いて目を覚ます。しかし大事なことは、その下女が目覚めるのは、女主人の美をたたえたその詩句によってではなく、その詩を作ったロンサールという詩人の名声ゆえなのです。(すなわちエレヌの美がもう老いのために消え去って久しいことがそのことでわかり、かつての詩を捧げた詩人がいまや名を聞くだけで、はっと目を覚ますほど、いまでも変わらず、というか、いっそう有名になっている、とわからせる仕掛けです) ロンサールがこの詩を捧げたエレヌは、当時の王后カトリーヌ・ド・メディシスの侍女の中でも才媛の誉れ高い女性とされていますが、彼女が「侍女」であったことを思うと、年老いたエレヌのもとにまどろむ「召使」の姿をもってくるのもまた、老練の詩人らしい技巧といえましょうか。したがって、高名な詩人ロンサールの名を聞いて、はっと目覚める召使もまた、じつはエレヌその人の年老いた姿の暗喩でもあるのです。

そんな高名な詩人に愛され、歌われていたと悟るときには、肝心の作者である私は、もう死んでしまってミルトの下に眠っている。ミルトは「詩人の木」といわれることも注意しておきましょう。もうこの世での肉体は滅び、骨もなく、ただ詩人の魂である「詩作」だけが残っている。「私は地の下に、骨もない幻影となって」とある詩句は、今若さと美を誇っている恋人もまた、やがて死すべき運命にあり、この世で美しさと若さを誇った影も形もなくなるだろうと言うのです。

一方は高名な詩人として後世に残り、今や「あなたは爐の傍で、背を丸めた老婆となり」、身をかがめて暖を取るような老婆になったあなた。きっと「ああ、あの時、詩でもって愛を捧げられた時に、自分の若さと美をこれ見よがしに示した揚句、詩人を顧みることなく、軽蔑して退けた」と、いまさらながら、そのことを後悔するに違いないとでも言うように、さんざん老いた彼女の醜さと孤独を強調しておいて、だから、と詩人は現在の時点に戻ってかき口説くのです。そんなにお高くとまっていなくて、若い時は二度あるものではない。愛を受け入れて青春を楽しまなければ！とオチをつけてこのソネット（4行、4行、3行、3行で終わる14行詩の形式）は終わります。

V. 青年の詩、老年の詩

李賀の桃の花も、ロンサールの薔薇も、ある意味ではエロティックな、恋愛の象徴として読むことができるでしょう。そして、これら二つの詩は、ともに短い青春の価値を歌い上げた名詩と言えます。この二つの詩はテーマからしても、よく似ているように思われるものです。けれども、すでにお気づきのように、ちょっとその調子が違いますね。そうです。一方はいかにも若い貴公子のやんちゃな、才はじけた若い覇気あふれる詩のように読めますが、もう一方は、何かお説教くさい。青春の大切さを言

っているようでありながら、その青春を惜しむ気持、というよりは青春への嫉妬めいたものさえ感じられるような気がします。

それもそのはず、李賀の「将進酒」は、彼が20歳代の作品ですが、ロンサールがこの「エレヌへのソネット」を書いた時は、54歳。平均寿命が50歳前後のその当時では相当の老齢です。一方のエレヌは30歳以上も年下の女性となれば、ロンサールの詩句にこもる情念も理解できるような気がします。若い美女に求愛する。その手段としてソネットを書いて送って、やや衰えかけてきた恋愛詩作家の名声を挽回する、実に古典の知識も踏まえた老練な技巧の名詩が生まれたわけです。しかし単に詩人としての自負だけが、その作詩を支えたようには思えません。やはり若い美しい女性の歓心を得る気持もまたきっとあったに違いありません。

おそらくは、ロンサールは美貌と知性で当時の宮廷で抜きんでていたエレヌという女性に本気で恋していたのだと思います。しかも自分が遙か年上ゆえに彼女に対して遠慮する心と嫉妬の気持ちが交錯し、さらにその一方でこれまで恋愛の手練者てだれものとみなされ、高名な詩人として過ごしてきた男の自負と、それに対する若い美女特有の老人から示される屈折した愛への情ない対応つれ。それらがこもごも響き合った形で、この詩の中に浮かび上がって来るような気がするの、私自身が年若い、同じく年若いロンサールにわが身を重ねる年齢になったことがあるのでしょ。

初めてこの詩を読んだ若い時の私は、そんな「老いらくの恋」のやるせなさ、若さに対する身を焼くような焦慮のことなど思いもせず、ただ「明日よりは摘め、命の薔薇」といった言葉づかいのカッコ良さに酔っていただけのような気が、今さらながらするのです。そして、このことからしても、読書にはそれにふさわしい「時」があることも確かですが、しかしまた、その「時」を経たのちにも、また新しい展開を同じ読書が示してくれることを、この事実は教えてくれます。つまりは、読書というのは、それぞれの時に、それぞれの読書の意義を見つけさせるものなのです。

かつてまったくわからなかった、思い至らなかったことが、同じ本を何年か、何十年か経て読んで、まるで霞みが消えるように、サーッと鮮やかに意味が目の前に現れてくる。その喜びはまた何物にも代えがたいものがあるのは、こういって叱られるかも知れませんが、味わったものしか分からない、貴重なものです。

けれども、それはそれとして、この二つの詩で、きわめて大事なことがその根底で繋がっていることを忘れてはなりません。それは李賀の詩に「酒ハ劉伶墳上ノ土ニ到ラズ」とある詩句で、いかにも酒を飲んで今を楽しむことを言っているようですが、李賀が引く劉伶という人物は先にも書いたように竹林の七賢の一人です。しかし彼の名前が歴史の上に残っているのは、決して大酒飲みだからではありません。彼の文人としての事績があって初めて、彼の名が後世に残っているのです。だからこそ劉伶の墓に酒がどれほど注がれようと、それは劉伶の文人としての価値と何のかかわりもない。

しかも文人として今なお人の記憶する劉伶の名を出すことによって、実は今そのことを歌う李賀その人もまた、その詩によって後世に残ることが期せられているのです。

確かに桃の花は今満開、その赤い花びらの乱落する様は、美しくはありますが、それだけの美です、それだけで終わる美です。また青春も短い人生の中のさらに一瞬のことにすぎません。けれどもその儂い美を歌うこの詩は、決して滅びない。あたかも酔いで顔を赤らめて、酔歩する劉伶の文人としての価値が滅びないように、李賀その人の文学も滅びることがない。そういう自負と祈りが込められているように思います。劉伶の名作「酒徳頌」（酒の徳を称える文章）が『文選』に収録されて読み継がれていますが、酒の徳を歌った名作の作者を引き合いに出すことによって、同じように酒の徳を言う自らの「将進酒」の詩が重ねられる訳なのです。

一方のロンサールの詩はその意図がもっとあからさまです。エレヌの若い、美しい命にもやがて老いが来て、そして詩人の自分が死ぬように、滅びてしまう。しかしその美は永遠なものになりうる。なぜなら、死すべき人間である詩人ロンサールの美しい詩に刻まれることによって、彼女の美は永遠に残ることになるからです。美しい薔薇も萎れて枯れる。美しいエレヌも滅びる。しかし薔薇の美、エレヌの美は、死すべき詩人ロンサールがそれを美しい詩に歌うことによって永遠のものになり得る。これこそがロンサールがこの詩に込めたメッセージにほかなりません。

VI. 詩人の運命、詩の運命

2003年の畑田塾では、ロンサールの詩に見られる「老いらくの恋」についての解説はしませんでした。しかし詩の永遠性については、強調した形で話をしたつもりです。ところで「詩の永遠性」といえば、同じような詩をロンサールより少しのちの詩人、劇作家のシェークスピア（1564－1616）のこれも有名なソネットを思い出す人も多いでしょう。

XVIII

Shall I compare thee to a summer's day?
Thou art more lovely and more temperate:
Rough winds do shake the darling buds of May,
And summer's lease hath all too short a date:
Sometime too hot the eye of heaven shines,
And often is his gold complexion dimm'd:
And every fair from fair something declines,
By chance, or nature's changing course untrimm'd:
But thy eternal summer shall not fade,
Nor lose possession of that fair thou ow'st,

君をしもたぐへつべきか、夏の日
うるはしさ、おだやかさ、君はまされり。
あらし風、五月の愛しき芽を落とし、
夏占むる時のかぎりの短さよ。
押照るや天の眼のたへがたき時、
黄金なすおもての曇る時もあり。
うるはしきすべてのものも時来れば、
宿命と天然の道にしたがふ。
されど君、君が常盤の夏は消えせず、
占めたまふうるはしさをも失はず、

Nor shall death brag thou wander'st in his shade,
When in eternal lines to time thou grow'st :
So long as men can breathe, or eyes can see,
So long lives this, and this gives life to thee.

William Shakespeare, *Sonnet X VIII*
Oxford Standard Authors, 1962

「死」も君が眞路に迷ふと誇り得じ、
滅びざるうたの中にし生きたまふ時。
もろびとの息する限り、目の見る限り、
このうたは生きて命を君にあたへむ。
ウィリアム・シェークスピア『小曲集』
竹友藻風訳詩集『法苑林』より。

いささか古めかしい雅語で綴られている訳詩を引きましたが、これは大正から昭和30年代まで活躍した詩人、英文学者で翻訳家も兼ねた竹友藻風、本名^{とらお}席雄、大阪大学文学部創設時の英文学初代教授のものを使用しました。翻訳もすぐれたものですが、英語の原詩がすばらしいですね。16世紀の英語なので、先のロンサールの詩と同じく、現在の綴り字と多少違っていただきますのでご注意ください。

この詩において恋人（一説には女性ではなく若い男性だという説もあります）が夏の日の美しさにたとえられているのは、イギリスでは5月、6月が一番爽やかな美しい季節とされているからです。しかも春と違って、夏となると美しさと力強さを感じさせますね。しかしその夏も長くは続きません。「夏占むる時のかぎりの短さよ」です。ここでも時の力のすさまじい破壊力が強調されます。美しい物も時が来たら、たちまち滅びてしまう。しかしあなたの美しさは、今たとえばかりの夏の日の美しさが、じつは、はかない、束の間の美にすぎないのとは全く違って、永遠に残る。こう言うておいて詩人は思いもかけない詩の展開を示します。

彼はなぜ恋人の美が永遠に残るかを説明するのです。なぜなら私があなたの美をこの詩の中で歌っているからだ、と。すなわち、たとえ恋人が死んでも、また詩人の私が死んだとしても、なお自分の詩の美しさによって、その詩が人々の間に残り、そのことで、恋人も詩人も永遠の命を得る、と歌っているわけです。恋人の美や自然の美を歌うかに見えたこのソネットは、その美の長く続かないことを嘆くがごとくですが、一転して彼の歌う「詩」の永遠を歌うことによって、限りある恋人の美や自然の美が、かえって永遠のものになることを祈る、まことに見事などんでん返しの離れ業が披露されるわけです。

こうしてみると、優れた詩人たちが、どれほど自らの詩の力、文学の力を信じていたか、つくづくと思ひ知らされます。しかも彼らの予言通り、李賀の「将進酒」が読まれる限り劉伶も蘇り、かつ本来消え去ったはずの美しい桃の赤い花びらさえ、今咲き誇っているように生き続けているではありませんか。16世紀の美女エレヌもロンサールに歌われることによって、そのソネットが人に読まれる限り、そのちょっと高慢な、若い美しさを見せ続けます。彼女のことを詳しく調べられて、どんな女性だったか現代の日本の私たちも知ることができますが、それはこのロンサールという詩

人が歌ったソネットがあり、その詩が今も読まれ、研究され続けているからなのです。

シェークスピアが歌った恋人がどんな人だったか。それは私も詳しくは知りません。しかし英文学者たちはいろいろと調査して、何人かのモデル、それらしい人々を挙げています（第一、シェークスピアその人が実際どんな人だったか詳しくはわかっていないところもあります。彼の戯曲は他の某という詩人の作品だ、という説がもっともらしく今も研究史を賑わわせているのです。ちょうど東洲斎写楽が何者かという議論と似ていますね）。

しかしモデルが誰であるか、作者がどんな人かは、じつはそれほど重要ではないのです。重要なのはこの作品そのものです。私たちはこうした作品を読んで、言葉の美しさや、イメージの豊かさ、そこに込められている人生への智慧や、哀感を、詩人とともに共感できる。そこにこそ文学の意義があり、楽しみがあります。そして、そうした文学の意義は、それ以後の人々に大きな刻印を押し続けていくのです。

VII. 読書の勧め

黒沢明の名作が没後10年ということで、近頃衛星放送で再放映されています。名作の中でも評判の高い「生きる」がこの間放映されていました。末期癌にかかった市役所の老齢の課長が、あと半年の命と宣告され、さまざまに生への執着を見せて、あれこれ狂態を繰り返した後、「生きている」自分にできる仕事として、長い間市民から訴えられていながら、さまざまな圧力によって手が付けられなかった泥沼を埋め立てて小さな公園を造るプランを実行に移そうとします。すさまじい抵抗に会いながらやっと公園を落成させたその時にはもう余命無く、その公園のブランコにのって、折から降りしきる雪の中を、ブランコをこぎながら死んでいきます。その時彼が雪の中で独りしゃがれた声で歌う歌があります。

命短し 恋せよ、乙女。

赤き唇褪せぬ間に、熱き血潮の冷えぬ間に。

明日の命は無いものを。

この歌「ゴンドラの歌」は大正期に女優松井須磨子が劇中で歌って評判になりました。作詞は歌人の吉井勇。ご覧になって判るように、これもまたこれまで述べてきた「明日を待たせるな、今日よりは摘め、命の薔薇」のテーマに連なるものです。実はこのテーマはすでにギリシャ・ローマ時代からあって、特にローマの詩人ホラティウスの名作で *carpe diem*（日を刈り取れ）という有名な詩句で知られるものです。イタリア・ルネッサンスの頃、その豪華と権勢で並ぶものの無かったフィレンツェのロレンツォ・メディチは、自ら開く絢爛たる宴席で、ひとり冷ややかに「青春はうるわし、

されどそは儂く過ぎゆく。楽しからむものは楽しめ。明日の日は確かならず」とつぶやいていた、と言います。これはロレンツォ自作の詩と言いますから、権力者の孤独もまたそこから響いてくるようです。

つまり「ゴンドラの歌」もまた、長い文学的なテーマをそっくりなぞるものに他ならないわけですが、しかし、大事な点で先に掲げたロンサールやシェークスピア、あるいは李賀の詩とは少し異なるところがあります。そのことは今までの説明でおわかりになると思います。すなわち、その文学の永遠性についての自覚です。残念ながら、吉井の作詞には、恋愛の現在性が歌われてはいますが、そうした文学者の気概、文学こそが永遠に残るもの、という気迫がそれこそ希薄です。そこには^{じょうじょう} 翳々として、哀切にみちた諸行無常に通じる諦念と、恋愛至上主義とまではいかないまでも、恋愛肯定の詩想だけが、やや通俗性を帯びて、浮き彫りにされているような気がします。所詮は大衆演劇の劇中歌ではないか、という態度まで見て取るのは酷というものでしょうが。

こうして短い詩一つとっても、そこからさまざまに、それこそ縦軸には古今、横軸には東西、それぞれに見えざる、あるいは、はっきりとした関係の糸が、優れた文学には見えてくるものなのです。それが見つかる時の嬉しさ、それを感じた時の感動は、先ほども申したように、他にたとえようもないものがあります。

しかしその感動を得るためには、やはり日頃からいろいろな文章に接していることが大事です。どんな作品でも、いやしくも今日まで、たとえば岩波文庫なり、新潮文庫なりに収められて残っている作品は、なにがしかの価値、いや大きな価値があるはずです。そうした作品を、人の批評などあまり気にせず、自分自身の目で読んでみることです。最初はつまらないかも知れませんが、しかしそれはひよっとしたら、それを読む人自身が「つまらない」からかも知れませんが、いろいろ読書を重ねていって、その人自身にさまざまな知識と感性が付いてくれば、読書は驚くほど興を増すものです。

私は、この春、長年勤めていた大学を辞めて、放送大学というテレビやラジオといったメディアを利用した講義を中心として学習する学校に勤めるようになりました。自宅で受信して勉強するのが原則ですが、働いていたり、主婦業に忙しくて週日はあまり時間がない、そんな学生のために各地の拠点となる学習センターができていて、テレビやラジオを視聴する施設を提供しています。それだけでなく、面接授業といって、いわゆる通信教育でいうスクーリングのプログラムが土曜日、日曜日を中心にたくさん組まれています。私は大阪学習センターに所長として勤めだしたわけですが、面接授業を受けにいらっしゃる学生さんは、年齢、職業がさまざまです。けれども一様に共通しているのは、若かった時にあまり勉強する機会がなかった、あるいは時間がなかった、気持ちがなかった、あるいは勉強したかったのに、いろいろな事情でできなかった、それだからこそ、講師の先生のお話を目いっぱい一生懸命に聞いて、質問も沢山したい。そういう方々が多いことを知りました。

そういう方が、いったん「知る」楽しみを知ったとき、本当に嬉しそうです。読書もまた同じことだろうと思います。読書は決して苦しいものでもなく、「勉強する」ものでもありません。森鷗外が、芝居などで若侍が「どれ、書見などいたそうか」と机に座るが、ちっとも書見しそうにない姿や形だと笑っている文章がありますが、なによりもまず、読書は楽しくなければなりません。そしてその本を読んで、自由に想像力を伸ばすことだと思います。近頃は凶悪な犯罪が多く発生しますが、ある意味では「想像力」が欠如しているための悲しい結果ではないでしょうか。

想像力は、SFとか、漫画とか、映像とかで育まれる、と思う方もおられるかもしれませんが、聴覚や視覚などに直接訴えるものが想像力を養うより、音も絵もない読書に刺激された想像力の方がはるかに豊かに育つものです。ギリシャ悲劇をはじめ、世界文学には近親相姦や父殺し、母殺し、兄弟殺し、さてはまた不倫など、フロイドなら「^{リビドー}慾動」と呼ぶような人間の心に潜むものが展開されます。そしてそうしたタブーを犯した時の、耐えがたい心の責苦、思いもかけない運命の報復もまた描かれることになります。それらを読んだものは、いわゆるアリストテレスがいう「^{カタルシス}浄化作用」を経験して、あたかもそうした慾動をわが身に体験したような気分になって、ひとつの成長を遂げて行くのです。

劇画のドバツ、ズバツといった直接的に視覚に訴えるものより、なんとかという流行のゲームのように、殺しても殺しても何度も立ち上がる怪獣や剣士の幻影に馴れてしまうより、じっくりと文字の流れを追う中に育てられていく想像力の方が、どれほど奥深い、幅広いものを人間の中に生み出すものか。近頃の電車の中のゲーム遊びを横目に見ながら、文庫本の読者の少なくなったことを嘆く私にも、ロンサールに倣って若い人たちに訴えかける名詩をひねり出す必要があるのかも知れません。

本稿は、2003年3月29日、大阪府羽曳野市郡戸の国登録有形文化財畑田家で、畑田家住宅活用保存会主催、大阪大学総合学術博物館協賛のもとで開催された第4回畑田塾での講演原稿をもとに作成したものである。

柏木 隆雄

1944 年生まれ。大阪大学大学院文学研究科（仏文学専攻）博士課程単位取得退学。

パリ第Ⅶ大学第Ⅲ期文学博士 神戸女学院大学文学部助教授を経て、

大阪大学大学院文学研究科教授（仏文学専修）、文学研究科長、文学部長（2004-2006 年）

日本フランス語フランス文学会副会長（2001-2005 年）

日本フランス語フランス文学会関西支部長（2006 年-）

現在、大阪大学名誉教授、放送大学大阪学習センター所長



主要著訳書

『謎とき「人間喜劇」』ちくま学芸文庫、

『イメージの狩人—評伝ジュール・ルナール』臨川選書

『交差するまなざし—日本近代文学とフランス』朝日出版社

『ジュール・ルナール全集』全十七巻、臨川書店

バルザック『いとこポンス』、藤原書店、バルザック・コレクション

畑田家住宅活用保存会 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/index.html>

<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo-english/index.html>